



テレマカシー

vol. **28**
2011.4.20発行

テレマカシーとは? ▶ Terima kasih=インドネシア語で感謝を表す言葉。在宅で看取らせていただいたある方は海外旅行が大好きでした。その方が最期にご家族に残された素敵な言葉を使わせていただきました。

震災の春

桜や木蓮、菜の花の咲く季節がやってきました
いつものように咲く花は、私たちを勇気づけます

この春に起こった出来事はあまりに悲しいものでした
自然の大いさの前に、私たちは無力でした
いのちのはかなさと大切さを知りました

震災を戒めとして、必要なことをやっていきます
私たちの心にあたたかな春が来る、その日まで

2011年4月

ひばりクリニック
うりずん

高橋 昭彦



▲民家の庭に咲く見事な桜
(宇都宮市一の沢)

◀ピンク色のしだれ桜
(宇都宮市一の沢)



◀新里町交差点付近
(いつものように美しい)

地震とその後について

今回の地震は、さまざまな教訓を与えてくれました。

そのとき私はある家庭の訪問中でした。地震が起こり(宇都宮は震度6強)、医療的ケアが必要な子どもが車へ避難するのを手伝いました。揺れは激しく、訪問先の中には屋根瓦が落ちたり、大谷石塀が倒壊した家もありました。訪問を終えてクリニックに帰りました。外来や診察室、うりずんは足の踏み場がないくらい落下物がありましたが、幸い、スタッフ、利用者とも無事でした。

翌日の3月12日(土)は休診として、被害状況の調査と片づけを行いました。壁土(珪藻土)のはがれ、壁やクロスのひび、などの被害がありましたが一どくはなかったです。計画停電の話が持ち上がり、在宅で過ごす人工呼吸器をつけた子どもの家庭には対策の確認とアドバイスをしました。

14日(月)からは外来診療を再開しましたが、余震が繰り返



▲震災直後の診察室

していました。ガソリンや生活物資が手に入りにくくなりました。うりずんは、スタッフの通勤が難しいこともあり、しばらく休業することになりました。木造のクリニックは揺れて落下物も多かったため、スタッフは恐怖を感じました。そこで、建物の安全性を工務店と専門家にチェックしていただき、基礎や柱など躯体には問題なく、同じ規模の地震が起っても倒壊の危険性はないだろうというお返事をいただきました。うりずんは2週間の休業ののち、3月28日(月)から営業を再開しました。

災害に対応するには、普段からの備えが必要です。しかし、やる気と限られたスタッフ、できる範囲の環境整備で始めた当院には限界がありました。重症の障がい児は自分で避難ができません。うりずんは、木造の建物をできる範囲で改修

したものです。水の備蓄も自家発電装置もありませんでした。その中でスタッフはよくやってくれました。身近で家庭的な施設と、災害に強い施設の両立はなかなか難しいですが、今回を糧としてできる範囲で防災対策を行います。



うりずんを子どもの地域ケアの拠点に



3年目のまとめからの展望

❖ はじめに

重症障がい児者レスパイトケア施設うりずん(うりずん)では、人工呼吸器や経管栄養、痰の吸引などの医療的ケアが必要な子どもの日中預かり(レスパイトケア)を行っています。事業化して3年目となる平成22年度の総括をして、今後の展望をお伝えします。

❖ うりずんとは

うりずんは、平成20年度から始めた医療的ケアが必要な重症障がい児を預かる施設です。現在、宇都宮市と日光市の子どもが利用しています。うりずんとは、沖縄の季節表現で、春と夏の間にある、やふあやふあと風の吹くさわやかな季節をさします。

❖ 実績と経営

平成22年度の営業日数は、震災の影響で3月の営業日が11日だったこともあり、225日でした。利用実数は、区分A(人工呼吸器装着状態)173名(前年度は138名)、区分B(吸引、経管栄養が必要な状態)343名(同213名)、合わせて516名(同351名)でした。営業日1日あたりの平均利用者数は、2.29名(同1.47名)でした。登録人数は区分Aが4名、区分Bが9名の合わせて13名(同11名)でした。

平成22年度のうりずんの総収入は9,192,200円、内訳は、事業収入8,827,500円、その他の収入364,700円(寄付・賞金)でした。平成22年度の総支出は、9,469,493円、内訳は、人件費8,573,227円、その他の支出896,266円(通信費・光熱費・交際費・消耗品・研修費・雑費)でした。平成22年度収支は、277,293円の赤字でした。なお、家賃、初期投資や駐車場改修の負担は算定していません。

《平成22年度のうりずん収支状況》

総 額		内 訳	
総収入	9,192,200円	事業収入	8,827,500円
		その他の収入	364,700円
総支出	9,469,493円	人 件 費	8,573,227円
		その他の支出	896,266円
差	▲ 277,293円		

❖ 効果と広がり

平成22年度は、非常勤介護職2名が増えて、医療的ケアや介護にゆとりと深みができました。利用者・家族にとっ

ても、普段の感覚でご利用いただけるサービスになってきたのではないかと考えています。

見学者は年間100名。レスパイトケアを立ち上げたいという小児科医や、看護大学教員、新聞記者など多岐に渡りました。見学者への対応はお預かり中となるためスタッフの負担が増えます。レスパイトケアを行う事業所が増えてほしい一方、お預かりの業務をおろそかにはできず、業務に支障のない範囲で対応しています。

❖ 課題

利用者に関連する問題としては、レスパイトケアは受ける側としては予定がたたない、母集団が少ない、平日は特別支援学校へ通学する子どもが多く利用が減る、土曜日と夏休みなどの長期休暇は希望が多くすべてを受けられない、送迎のために他のサービスとの調整が必要になる、学校を卒業した子どもが毎日過ごす場所がない、などがあげられました。

運営側の課題としては、介護職だけの運営はできない、看護師が1人であるため休みが取りづらい、スペースが限られている、災害時の対策を充分にとるには人員配置も設備も拡充が求められる、などがあげられました。

❖ 展望

経営的に成り立たないと、レスパイトケアを行うところが増えません。今は、医業(主に在宅医療)で得た収入で補填して運営していますが、このやり方では、うりずんは私がいなくなったら存続ができません。しかし、それでは子どもとご家族に申し訳ないので、うりずんが独立で運営できるような形にしていかなばならないと思うに至りました。

うりずんの看護師が有休をとれるよう複数配置にすること、介護職の育成を続けること、人材のプールができること、これらを叶えながら経営的に成り立つようにするには、うりずん単体の運営では不可能です。そこで今後の展望として、うりずんと新設の訪問看護、ホームヘルプの部門を併せて、独立した形で子どもの地域ケアの拠点にすることを考えています。

❖ 子どもの地域ケアの拠点

訪問看護は小児だけでは運営はできないので成人・高齢者も対象とします。経営が安定したら、相談支援、留守番看護、学校への支援など、子どもと家族の支援も強化していきたいと考えています。

これまで、在宅ケアにおいては、在宅医療以外の業務はすべて外部との連携で行ってきましたが、うりずんを存続させるためにやり方を変えます。ご理解のほどお願いいたします。

❖ おわりに

平成23年4月から、福岡市の「にのさかクリニック」では、地域生活ケアセンター「小さなたね」を開設しました。重度心身障害児のためのレスパイトケア施設と、訪問看護ステーション、訪問介護ステーションを併設したものです。地域で子どもと家族の生活を支える仕組みをつくっていくという発想には共感します。二ノ坂さんとは、7月に行われる日本ホスピス・在宅ケア研究会で一緒にしますので、情報交換をしたいと思います。

うりずん日記

うりずん サービス管理責任者
看護師 三上 綾子



●平成23年1月～3月のご利用状況

区分	1月	2月	3月	合計
A	15	13	8	36
B	39	32	17	88
計	54	45	25	124

* 区分A……………人工呼吸器装着の方
* 区分B……………人工呼吸器を必要としない方
* いずれも延べご利用人数です

●平成23年1月～3月のご来所状況

	1月	2月	3月	合計
見学者	11	11	4	26
ボランティア	1	0	0	1
計	12	11	4	27

* ボランティアは延べ人数です

●現在の登録状況

区分A(人工呼吸器装着の方)	4名
区分B(人工呼吸器を必要としない方)	9名
合計人数	13名
契約準備中の方 区分A	0名
契約準備中の方 区分B	1名
契約準備中の方の合計人数	1名

* 登録ご利用者の年齢……………2歳～18歳

●平成23年1月～3月の寄付関係

ご寄付	7件
ご贈答品	0件

平 成23年度がスタートしました。うりずん利用者としては初めて特別支援学校高等部を卒業し、4月から生活介護(デイサービス)を実施している事業所へ進路先を決めた方がいます。おめでとうございます。その方は、希望する日数を1か所で受け入れることは難しかったので、複数の事業所を併用しながら今後の生活を送ることになります。一日でも早く新しい環境に慣れることをスタッフ一同願っています。今後も高等部を卒業するうりずんの利用者と家族が、卒業後の進路先が決まらないという不安な日々を送ることがなく、当たり前のように日常生活の場が提供されることを望みます。



▲フェルトって気持ちいいね



▲青鬼さきちゃった

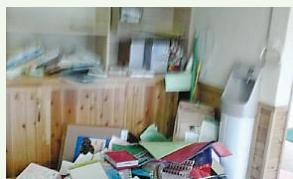


▲楽にお昼寝よ

さ て、話は変わります
が、3月11日の地震発生時のうりずんの様子をお伝えします。

うりずんでは、当日呼吸器を必要とする利用者が1名いました。職員は、地震発生時に呼吸器の転倒や停電、塗り壁の飛散や落下物による怪我など予測されることのすべてを一瞬のうちに判断し、短時間で確実に必要な対応を取らなければなりません。看護師である私がとっさに感じたこと、それは、普段は冷静に対応できる介護職もこの非常事態に混乱して支援にあたれないのではないかと、利用者とスタッフに怪我を負わせてしまったら……など様々な思いが頭の中を駆け巡りました。しかし、介護職は表情がこわばりながらも自分たちに言い聞かせるかのように、利用者にも「大丈夫だよ、大丈夫だよ」と声をかけていました。それを見て「避難できる! しなれば!」と判断し、すぐに駐車場へ避難するための段取りの指示を出しました。

うりずんの玄関は散乱した品々で移動するには危険な状態です。迷うことなく(通常の移動方法のバギーは考えず)利用者を呼吸器から離脱し、アンビューバッグで加圧しながらスタッフ2名



▲散乱した室内



▲棚からの落ちた品々



▲駐車場で待機中



▲風除けしながらおやつ注入

で抱きかかえ、窓から駐車場へ避難する方法を選択しました。同時にもう一人のスタッフに、離脱した呼吸器を持参して一時避難するように声をかけました。長く強めの余震が繰り返す中、室内から吸引器、注入セット、帰宅用の荷物とバギーを運び出し、室内から延長コードで機材類の電源確保の準備をしつつ、お迎えが来るまでの1時間を駐車場で待機しました。

心配されているご家族、一緒に迎えに来る予定の事業所への連絡を試みましたが、固定電話も携帯電話もつながりませんでした。利用者、家族、介護職はとても不安だったと思います。でも、日常の関わりから得られた信頼感、常に緊張の中での支援を強いられるスタッフの精神面の強さに救われました。

今 回のような非常事態を乗り切るには、人手も大切ですが、日頃からの関係性と臨機応変に状況判断し、迷わず行動に移すことができるスタッフであり続けることがとても大切なのかもしれません。多少の被害はありましたが、皆さんが無事で本当に良かったです。

わっどわ〜く

物品のご寄贈に感謝!

国際ソロプチミスト宇都宮(矢吹佳子会長)より、楽器、DVDプロジェクター、パルスオキシメーターをご寄贈いただきました。レスパイトケアの活動に彩りと映像、そして安心感を与えてくれる貴重な品々をお贈りくださり、誠にありがとうございました。



▲ハンドベルを鳴らそうよ
(寄贈いただいた楽器を演奏)

▶プロジェクターセット
(ディズニーや人気の「嵐」などを楽しんでいます)



▲楽器セット
(音の出るいろんな楽器です)



▲パルスオキシメーター
(動脈血の酸素飽和度を測定する装置です)



テレマカシー27号へ
寄せられた感想から

「新しい医療のかたち」賞の受賞

●地道な活動が評価されて、今後の医療の新しいシステム・モデルとして社会化を更に広げたことを大変嬉しく思います。

三上看護師の「うりずん日記」もスマートでホット、毎号、楽しみにしています。クリスマス会を3回楽しんだとのこと、クリスマス会を楽しみ、人生を楽しみ、人々とのつながりを楽しむ取り組みに「うりずん」・ひばりクリニックの皆様の姿勢が伝わってきます。スナップを拝見して、この子ども達の人生の楽しい瞬間につながることができ、また元気に仕事に励めます。

(宇都宮市 小林英二さん)

●ほか、ご意見多数。

♡うりずんにご寄付を下さった皆さん、テレマカシー発送用に切手をお送りくださいました皆さん、ありがとうございました。<(_)_>

東日本大震災・緊急支援募金 ありがとうございました。

♡ご支援いただいた募金は、皆様のお気持ちとともに、自治医科大学へ39,219円、とちぎボランティアネットワークへ29,998円送金いたしました。ご協力ありがとうございました。<(_)_>

本 書籍紹介 「なみだ」

「いつからだろう、なみだが やさしく頬をぬらしてくれるのは。」

細谷亮太さんの「なみだ」という本を紹介します。世界を震撼させた東日本大震災の頃、この本は出版されました。

聖路加国際病院副院長である細谷さんは、小児科医です。長年、小児がんや難病の子どもたちの診療や在宅医療を行ってきました。泣けなくなったら医者



細谷亮太さんの「なみだ」
(題字も細谷さん)

をやめるといふ細谷さんは、俳人でもあり、亡くなった子ども達の供養にお遍路を行う稀有な人物です。

私達は涙の意味を深く考える機会はありません。人は悲しいことやつらいことがあると、涙を流します。冷たく、暗く、悲しい涙が、いつの日か、やさしく頬をぬらしてくれると感じるときがきます。その涙の意味を、

この本は私たちに問いかけています。

- 文/細谷亮太 絵/永井泰子
- ドン・ボスコ社 1200円+税
- ISBN978-4-88626-515-9

「ひばりクリニック」のご案内

● 診療時間 ●

時 間	日	月	火	水	木	金	土
9:00~12:00	(休診)	○	○	(休診)	○	訪問診療	○
午後 (在宅医療)	(休診)	訪問	訪問	(休診)	訪問	訪問	訪問

● ひばりクリニックの運営理念 ●

- 1) 在宅で過ごされるご利用者に出前の医療を提供すること
- 2) 子どもからお年寄りまで診る家庭医の機能を提供すること
- 3) 障がい児・者やお年寄りの生活を支える市民活動を支援すること



〒321-2118 栃木県宇都宮市新里町丙357-14
TEL 028-665-8890 FAX 028-665-8899
E-mail hibari-clinic-01@theia.ocn.ne.jp
U R L http://hibari-clinic.com/



栃木県宇都宮市の北西部、新里町(にっさとまち)にある、ログハウス風の小さな診療所です。

- JR宇都宮駅から「ろまんちっく村」バス約35分
- お車で 東北自動車道 宇都宮ICより5分 宇都宮ろまんちっく村 入口向かい側

●この通信は、子どもから大人まで、障がいのある人もない人もどんな人も社会から排除されことなく、地域で一緒に生きていける世の中を目指して、ひばりクリニックが企画・編集しております。この通信についてのご意見・ご感想はひばりクリニックまでお寄せください。